

フランス語とバスク語の時制における比較研究

Etude comparée de temps en français et en basque

杉山 朱実
Akemi SUGIYAMA

1. はじめに

フランスには様々な方言や言語があるが、その中で、南仏のバスク語は、言語人口約50万-60万の言語である。その大部分は、スペイン語あるいはフランス語との二言語使用者であるが、バスク語は隣接するインド・ヨーロッパ語族に祖を置くロマンス諸語とは起源を異にする言語である。

ピレネー山脈に現存する局地言語であるバスク語を、隣接するフランス語・スペイン語もっと一般的にはロマンス諸語から分けている際だった隔たりは語形成にあり、特に、バスク語独特の時制体系における諸成分表示にあるといえる。又、文法特徴として、動詞活用形における多人称性(polypersonalism)や能格をあわせもち、それ故、古くから様々な言語学者達の興味を引き、バスク語と他言語との親族性、類縁性等が検討されているが、未だその起源は謎のままである。その最も顕著なものが、ルネ・ラフォンの行ったコーカサス諸語との比較である。能格は、アメリカの土着語、マヤ語、オーストラリアの土着語、ポリネシア諸語等のなかでも見つかっている。能格をもつ様々な言語との比較研究の結果は、早急に現れないとしても、数ある起源不明言語の類縁、親族性を調べるきっかけとなったことの意味は大きいといえる。「能格的な表現様式がなくても能格現象的な含みは、いずれの言語にも存在し、あるいは存在したにちがいない。」と「言語研究とフンボルト」の中で泉井久之助氏は語り、さらに、「それはすべてにおいて、大いなる力に敢えてあらがうことのない精神形成の言語による表現的なあらわれである。」と結ばれる。事実、以前に考えられていた言語の二極対立性(主語-目的語)は、印欧語族に祖を持ち、現ヨーロッパに点在する極めて人為的に練りあげられていった文法性の高い言語の現象であり、特殊な現象であることに気づきはじめた意義は、今後の言語研究において重要な視点をあたえてくれたと言える。さて、こうした能格の類似性や親族性から様々な検討が行われたバスク語であるが、その起源については、常に、言語学者の注目を集めながらも不明であり、謎とされている。コエン(Marcel COHEN)は、「世界のことば」の中で、「--- イベリア半島が、すくなくとも大きな面積にわたって、イベリア語を話していたことはわかっている。しかしこの古い言語は知られていないし、バスク語がその片鱗をとどめているかどうかとしかいえない。---」と書いている。フンボルトも「--- イベリア語がかつて全半島の唯一の言語であったこと、バスク語はその派生語であると考えた。---」(『バスク語入門』より)一人であった。古代、イベリア半島にあった言語とバスク語との起源については、いまのところ、こう考えられている。まず、イベリア語(ibère)は、紀元前4世紀から西暦初頭ごろまでの時期に属するイベリア碑文により知られる言語であり、イベリア半島の地中海の内陸部、およびフランス南東部に分布している。その大部分は特殊なイベリア文字で、一部はギリシャ文字で書かれているが、読むことは出来る。しかし、二言語併記物が発見されていないため、意味はまったくわかっていない。バスク語の知識をもってしても解くことが出来ない故、系統不明のバスク語とは別の、前印欧語的言語とされている。一方、アキタニア語(アクイターニア語)は、紀元前3世紀から後3世紀頃の間フランス西南部のアキタニア地方のラテン語碑文中に記されている人名および神名により知られる言語であるが、これは、バスク語に近い様相を呈しており、ローマ時代の初期にピレネー山脈付近、オーシュ(Auch)、Adour川の流域地域に、バスク語と同系の言語が行われていたらしいと推測できる。また、メイエ、コエン監修の『世界の言語』のバスク語の箇所では、その付記で、北アメリカの土着の言語との、動詞における多人称表示の抱合語的な構造の類似から、「--- ついに大西洋中において存在したと想像させる大陸を通じてヨーロッパとアメリカの往来が可能であった時代の名残だとする説まであらはれたほどであるが(H. de Charency)、もちろん単なる憶測にすぎない。しかし、系譜的な問題は別としても、この間にかかる構造上の類同性が存在する事実には注意しなくてはならな

い。---」と述べられ、誠にバスク語は夢をかきたてられる言語なのである。先ずは、同著で「--- 多くの言語学者にコーカサス諸語、エトルリア語 (=エトルスク語 (étrusque) イタリア中部のトスカーナ地方を中心としたエトルリア (Etruria) 地方に紀元前1000-300年ごろ行われた言語であるが、未解読のため印欧語に属するか否かも不明な言語である。ラテン語以前のイタリア半島の有力な言語とされ、ローマ人子弟は、エトルリア人から教育を受けていたといわれる。) などが、その一部をなす大きな地中海語族 (famille méditerranéenne) にバスク語が帰属するであろうと想像している。---」と述べられるように、バスク語と近隣の地中海言語との関係から、検討を始める新たな歩みが、過去の人類の歩みを知り現在をも知ることが出来る道しるべとつながるものと思える。このように、現在、高まりつつあるバスク語への関心の中で、本稿では、このバスク語動詞を隣接するフランス語動詞との比較において説明してみたい。

バスク語動詞には、統合的屈折 (une flexion synthétique) をした単純形動詞と、分析的屈折 (une flexion analytique) をした複合形動詞とがある。バスク語動詞の基本を説明する上で、バスク語動詞の法は、「現実法 (Réel)」か「可能法 (Potentiel)」である。基本となる時制は、「現在 (Présent)」と「非現在 (Non-présent)」である。非現在には「過去 (Passé)」と「仮定 (Eventuel)」を含む。これらの法・時制の組み合わせにより、六種の表現が説明できる。

動詞の法・時制

- | | | |
|------------------|------------------|------------------|
| 1) 現実法・現在 (Pr R) | 2) 現実法・過去 (Pa R) | 3) 現実法・仮定 (Ev R) |
| 4) 可能法・現在 (Pr P) | 5) 可能法・過去 (Pa P) | 6) 可能法・仮定 (Ev P) |

動詞に関わる様態を説明するアスペクトでは、起動相 (inchoatif), 終端相 (terminatif), 反復相 (répétif) は語彙的結合によって説明される。また、バスク語には、過去における継続の表現を説明する継続相 (duratif) と否継続の表現を説明する点括相 (ponctuel) の対立、そして完了相 (perfectif) の特に重要なアスペクトがある。さらに、一方では現在における「非現実」を説明し、もう一方では未来における「可能性」を説明するニュアンスの違いも表現できる。しかし、これらの文をフランス語と比較してみると、フランス語では差異が現れず同一の文となってしまう。

本稿では、この様な諸例をバスク語とフランス語との比較からたどることで、系譜的な問題は別として、もっと一般的には、バスク語をロマンス諸語から分けている隔たりや、共通性を検討し、隣接しているながら動詞における特異な言語表現を維持している各言語の構造上の特殊性を明らかにしていきたい。

まず、論考の前提となるバスク語の概念について、確認しておきたい。以前はイベリア半島全土から南仏の広範囲に渡って語られていたバスク語も、今では主に、スペイン・フランスにまたがるピレネー山脈地域のみの方地言語となってしまった。とは言え、様々な方言差があるものの現在では、フランス側バスク語を、ラブルール (le Labourd), スール (la Soule), 低ナバラ (la Basse-Navarre) の三方言に、スペイン側バスク語を、ナバラ (la Navarre), ギプスコア (le Guipuzcoa), ビスカイヤ (la Biscaye), アラバ (l'Alava) の四方言の計七方言に区別している。さらに、ナバラ・ラブルール方言をもとに、「LE BASQUE UNIFIE (EUSKARA BATUA)」(一つのバスク) への動きが盛んであり、1980年と1987年に行われたバスク語アカデミー主催の国際バスク語学会議は、その一つの動きを裏付けるものである。バスク語のそれぞれの方言では、各々の変動があるが、ここでは、理論的体系である「統一バスク語 (LE BASQUE UNIFIE)」に相当するバスク語動詞を検討の対象として用いることにする。

2. バスク語動詞の形態

バスク語動詞には、先に述べたように統合的屈折をした単純形動詞と、分析的屈折をした複合形動詞とがある。単純形動詞は、今ではとても稀であるが、バスク語動詞の基本体系を説明する上で、まず、この単純形動詞の構造をみてみたい。

例として、動詞 "e g o n (rester)" の単純形を提示する。

Tableau des tiroirs du système simple du verbe basque

		<u>TEMPS</u>		
			<u>MODE</u>	
			REEL	POTENTIEL
PRESENT			d a g o (il reste)	d a g o k e (il peut rester)
	PASSE		z a g o n (il restait)	z a g o k e n (il pouvait rester)
NON- PRESENT	EVENTUEL		(b a) l a g o ((s')il restait)	l a g o k e (il resterait)

動詞"egon (rester)"の語根は、"-go-"である。人称表示は、接頭辞で示されるが三人称のみは、時制によって変わる。

- 1) d- は、三人称・現在を示す。
- 2) z- は、三人称・過去を示す。
- 3) l- は、三人称・仮定を示す。

"dago", "zagon", "lago" 等の "-a-" は、子音衝突を避けるための挿入母音である。
 "zago-n", "zagoke-n" の "-n" は、過去の表示である。"dago-ke", "zago-ke-n",
 "lago-ke" の "-ke-" は、可能法の表示である。

3. 単純形動詞の衰退に伴う複合形動詞への意味の移行

EX) LE VERBE "JOAN" (ALLER)

- 1) Noa. : Je vais.
- 2) Joaten naiz. : Je suis dans l'action d'aller. (Je vais)
- 3) Joaten ari naiz. : Je suis en train d'aller.

現在、動詞"joan"には、統合的屈折の単純形動詞と、分析的屈折の複合形動詞が共存している。以前においては単純形動詞を主に使用し、例に示した様に"noa"は、"Je vais"のみの意味を持ち、"Joaten naiz"は"Je suis dans l'action d'aller"の意味をもっていった。現在では、殆どが複合形動詞を用いるようになった。それに伴って、この例の場合には、単純形動詞"noa"の使用は少なくなり、"noa"がもっていた"Je vais"の意味で、複合形動詞"Joaten naiz"が使われる様になった。それ故、"Je suis en train d'aller"の意味を説明する為には、近年になって複合形動詞に、更に、"ari"が加えられたのである。従って、今日ではこの様に、複合形動詞が大方を占めるようになった。

では次に、この複合形動詞の諸形成について検討してみる。

4. 複合形動詞

SYSTEME DES TIROIRS COMPOSES

La forme composée est constituée,

- a) d'une des 3 formes de l'élément "participe /substantif verbal"+ l'auxiliaire
 "izan" pour les verbes intransitifs,
 ou "ukan" pour les verbes transitifs.
- b) du radical verbal + l'auxiliaire de base "di-" pour les verbes intransitifs,
 ou "za-" pour les verbes transitifs.

Il y a 3 formes de "l'élément participe/substantif":

- 1) (passé)
participe passé : radical verbal + "-i/-tu/ etc.." (marque du passé)
- 2) (présent)
substantif verbal : radical verbal + "-te/-tze" + "-n" (action) (inessif)
= "dans l'action (de---)"
- 3) (futur)
participe passé au génitif : participe passé + "-ko(-go)/ -en" (cf.1) (génitif)

現在のバスク語動詞の大部分は、上記に示した a), b) に二分される複合形動詞によって説明することができる。

- a) 「"過去分詞/動名詞" 要素の三つの形の内の一つ」 + 「助動詞」 第一助動詞として、自動詞には "izan" (être), 他動詞には "ukan" (avoir) を用いる。
- b) 「動詞語根」 + 「助動詞」 第二助動詞として、自動詞には "di-" を基礎とする、他動詞には "za-" を基礎とする助動詞を用いる。

助動詞の法は一般に現実法であるが、接辞 "-ke-" を付け加えた可能法も説明できる。助動詞の時制は、一般に現在と(過去と仮定を含む)非現在である。a), b) とも、助動詞は、人称を説明するのに重要な役割をもつ。

a) の「"過去分詞/動名詞" 要素の三つの形」は、語彙の意味とアスペクトを説明し第一助動詞との結びつきにより、時制を説明するのに役だっている。以下に、三つの形を提示する。

- 1) (過去) 過去分詞 : 動詞的語根 + "-i/ -tu/ etc.." (過去の表示)
- 2) (現在) 動名詞 : 動詞的語根 + "-te/ -tze" + "-n" (行為の最中を示す) = (行為) (内格)
- 3) (未来) 過去分詞の属格 : 過去分詞 + "-ko(-go)/ -en" (1) を参照 (属格)

次に、1. 過去分詞、2. 動名詞、3. 過去分詞の属格、4. 動詞の語根について詳しく検討してみる。

LES TROIS ELEMENTS -" PARTICIPE" - ET LE RADICAL VERBAL

LE PARTICIPE PASSE

VERBE INTRANSITIF	VERBE TRANSITIF
EX) sartu(entrer)	EX) ikusi(voir)
verbe radical	
sar	ikus
verbe radical pur	
* sar	* kus

バスク語には、フランス語に有る様な「不定法」が存在しない。それ故、動詞の過去分詞を例えば、動詞"sartu"(entrer), 動詞"ikus"(voir) 等と言い、便宜上使っている。動詞"ikus"(voir) の接頭辞"-i-"と、動詞"egon"(rester) の接頭辞"-e-"は、分詞の表示であるが、この"-i-", "-e-" をもつ動詞は古い形のものである。もし、今、新しい動詞を作るなら、分詞の接頭辞"-i-", "-e-"は、除かれる傾向にある。接尾辞"-tu", "-i", "-n" は、過去分詞の表示である。過去分詞の大部分は、これらの接尾辞をもつが、動詞"hil"(mourir/tuer) 等、他の形も若干ある。*純・動詞の語根は、分析の結果、生じる形であるので、この形を直に使うことはない。

4. 1 過去分詞

EX 1) VERBE INTRANSITIF
 $\frac{s \ a \ r \ t \ u \ d \ a}{\text{<"izan"PrR3>}}$: il est entré (Pa PrR3)

EX 1') VERBE TRANSITIF
 $\frac{i \ k \ u \ s \ i \ d \ u}{\text{<"ukan"PrR33>}}$: il l'a vu (Pa PrR33)

"sartu" は、"entrer"の意味をもつ過去分詞で、助動詞には"izan"を使う。"ikusi" は "voir"の意味をもつ過去分詞で助動詞には"ukan"を使う。"da"は、動詞"izan"の三人称・単数主語の現実法・現在の形である。"du"は、動詞"ukan"の三人称単数主語・三人称単数目的語の現実法・現在の形である。

4. 2 動名詞 LE SUBSTANTIF VERBAL

EX 2) VERBE INTRANSITIF
 $\frac{s \ a \ r \ + \ t \ z \ e \ + \ n}{(entrée) \ (l'action) \ (dans)} = \text{"dans l'action d'entrer"}$
 $s \ a \ r \ t \ z \ e \ n \ d \ a$: il entre (Pr PrR3)

EX 2') VERBE TRANSITIF
 $\frac{i \ k \ u \ s \ + \ t \ e \ + \ n}{(vue) \ (l'action) \ (dans)} = \text{"dans l'action de voir"}$
 $i \ k \ u \ s \ t \ e \ n \ d \ u$: il le voit (Pr PrR33)

"sartzen" は、動詞"sartu"の動名詞の形で「入る」という行為の最中にある意味を示す。"ikusten"は動詞"ikusi"の動名詞の形で、「見る」という行為の最中にある意味を示す。第一助動詞の現実法・現在との結びつきで「現在」の意味を説明することができ、現在バスク語においては、この形が、最も頻繁に使われる。

4. 3 過去分詞の属格 LE GENITIF DU "PARTICIPE PASSE"

EX 3) VERBE INTRANSITIF
 $\frac{s \ a \ r \ t \ u \ + \ K \ O}{(entrée) \ (Génit.loc)} = \text{"Génitif du participe passé du verbe sartu"}$
 $s \ a \ r \ t \ u \ k \ o \ d \ a$: il entrera (Fu PrR3)

EX 3') VERBE TRANSITIF
 $\frac{i \ k \ u \ s \ u \ + \ K \ O}{(vue) \ (Génit.loc)} = \text{"Génitif du participe passé du verbe ikusi"}$
 $i \ k \ u \ s \ i \ k \ o \ d \ u$: il le verra (Fu PrR33)

「過去分詞 + 属格」の「過去分詞の属格形」が、第一助動詞の現在・現実法との結びつきで、「未来」の意味を説明することができる。以上から、バスク語の複合形動詞では第一助動詞の現在・現実法との結びつきで、

- 1) 「過去分詞」は「過去」の意味を説明することができる、
 - 2) 「動名詞」は、「現在」の意味を説明することができる、
 - 3) 「過去分詞の属格形」は、「未来」の意味を説明することができる。
- 次に、「動詞の語根」を検討してみる。

4. 4 動詞の語根

LE RADICAL VERBAL

EX 4) VERBE INTRANSITIF
s a r d a d i (n) : qu'il entre (PrCR3)
 (radical verbal) (Aux. "di-"PrR)

EX 4') VERBE TRANSITIF
i k u s d e z a (n) : qu'il le voie (PrCR33)
 (radical verbal) (Aux. "za-"PrR)

動詞の語根は、自動詞には"di-"を基礎とする第二助動詞を結びつけ、他動詞には"za-"を基礎とする第二助動詞を結びつけて、フランス語での接続法的意味あいを説明するのに役立つ。"sar"は、"entrer"の語彙的意味のみを説明する動詞語根で、自動詞の第二助動詞"di-"型と結び付く。"ikus"は、"voir"の語彙的意味のみを説明する動詞語根で、他動詞の第二助動詞"za-"型と結び付く。

次に、第一助動詞として使用した、自動詞における"izan"(être)と、他動詞における"ukan"(avoir)を検討する。

5. 第一助動詞 PREMIERS AUXILIAIRES ;
 " I Z A N " E T " U K A N "

Le sens du verbe simple "izan"

izan	"verbe intransitif"	être
da	Présent Réel 3	il est
zen	Passé Réel 3	il était
(ba)litz	Eventuel Réel 3	(s')il était
dateke	Présent Potentiel 3	il peut être
zateken	Passé Potentiel 3	il pouvait être
lizateke	Eventuel Potentiel 3	il serait

Le sens du verbe simple "ukan"

ukan	"verbe transitif"	avoir
du	Présent Réel 3	il l'a
zuen	Passé Réel 3	il l'avait
(ba)lu	Eventuel Réel 3	(s')il l'avait
duke	Présent Potentiel 3	il peut l'avoir
zukeen	Passé Potentiel 3	il pouvait l'avoir
luke	Eventuel Potentiel 3	il l'aurait

動詞"izan"(être)と"ukan"(avoir)は、第一助動詞として前出の三要素(過去分詞・動名詞・過去分詞の属格の形)の内の一つとの組み合わせにより、今では一般に、バスク語動詞の体系の大部分を担っているが、単純形動詞としても使うことができる。単純形動詞としての機能は、上記に示した時制・法・人称を説明する。単純形動詞としても機能する動詞"izan"と動詞"ukan"が、複合形動詞の第一助動詞としても機能する形を次に、まとめてみた。

TROIS ELEMENTS PARTICIPES	TEMPS ET MODE	FORMES DE L'AUXILIAIRE
1) le participe passé (passé)	1. Pr Réel	da / du
2) le substantif verbal (présent)	2. Pa Réel	zen / zuen
3) le génitif du participe passé (futur)	3. Ev Réel	(ba)litz / lu
	4. Pr Potentiel	dateke / duke
	5. Pa Potentiel	zateken / zukeen
	6. Fu Potentiel	lizateke / luke

以上見てきた様に、バスク語では複合形動詞の頻度が増しているが、その第一助動詞として、単純形動詞としても機能する動詞"izan"と動詞"ukan"を使っている。このことは、フランス語で複合形動詞の助動詞として動詞"être"と動詞"avoir"を使用するのと、似た現象であると言える。

次に第二助動詞を検討する。

6. 第二助動詞"di-" と"za-" AUXILIAIRES SECONDS ; "DI-" ET "ZA-"

EX) Nahi dut joan dadin eta ikus dezan : en basque.

Je veux qu'il (y) aille, et qu'il le voie : en français.

第二助動詞は、第一助動詞の様に、単純形動詞として使うことはできない。常に、動詞語根との結合で使われるが、助動詞としての時制・法・人称表示機能は、第一助動詞と同一である。また、第二助動詞の様々な形態は、動詞語根との結合により、接続法、条件法、命令法的意味あいを解説するのに使われる。

上記の例で、"joan"は、フランス語で"aller"を意味する、動詞"joan"の動詞語根である。"ikus"は、フランス語で"voir"を意味する、動詞"ikusi"の動詞語根である。

"dadin"は、"di-"を基礎とする第二助動詞の「現実法・現在・三人称単数主語（動作主）」形で、自動詞の動詞語根との結合により接続法的意味あいを説明する。

"dezan"は、"za-"を基礎とする第二助動詞の「現実法・現在・三人称単数主語（動作主）」形で、他動詞の動詞語根との結合により接続法的意味あいを説明する。

"dadin"と"dezan"の"-n"は、相当するフランス語構文の"que"を説明する。現在では第二助動詞の現実法・現在の実用形は、常に接続法的意味あいを説明する接尾辞"-n"を伴っている。

次に、「第二助動詞と動詞語根の結合」の主語が、三人称の場合の一例を挙げてみる。

La combinaison du radical verbal et de l'auxiliaire second (Avec une 3ème pers.sg. du sujet)

le radical verbal Aux.de base "di-" pour les verbes intransitifs

1.	sar	dadin	(PrCR)	: qu'il entre
2.	sar	zedin	(PaCR)	: qu'il entrât
3.	sar	(ba)ledi	(EvCR)	: (s')il entrerait
4.	sar	daiteke	(PrCP)	: il peut entrer
5.	sar	zitekeen	(PaCP)	: il pouvait entrer
6.	sar	liteke	(EvCP)	: il entrerait

le radical verbal Aux.de base "za-" pour les verbes transitifs

1.	ikus	deza (n)	(PrCR)	: qu'il le voie
2.	ikus	zezan	(PaCR)	: qu'il le vit
3.	ikus	(ba) leza	(EvCR)	: (s')il le voyait
4.	ikus	dezake	(PrCP)	: il peut le voir
5.	ikus	zezaken	(PaCP)	: il pouvait le voir
6.	ikus	lezake	(EvCP)	: il le verrait

この中の幾つかの場合、第二助動詞の語彙的意味が生じずに、第一助動詞と同じ様な役割を果たすことがある。この点に着目し、次に、バスク語の重要なアスペクト的ニュアンスの違いを検討する。

7. アスペクト的ニュアンスの違い NUANCE ASPECTUELLE IMPORTANTE

EX1-a)	Sartzen	balitz	(Pr EvR3)	: S'il entrerait <irréel> (aujourd'hui)
EX1-b)	Sar	baledi	(EvCR3)	: S'il entrerait (demain)
EX2-a)	Sartzen	lizateke	(Pr EvP3)	: il entrerait <irréel> (aujourd'hui)
EX2-b)	Sar	liteke	(EvCP3)	: il entrerait (demain)

上記の例では、EX1)と EX2) で示した様に、もしフランス語に訳すとすると、同じ訳になってしまう。しかし、二つの文の間には、ニュアンスの違いがある。EX1-a)と EX2-a)の形は、現在における「非現実」を説明する。一方、EX1-b)と EX2-b)の形は、未来における「可能性」を説明する。

次に、バスク語のアスペクトを検討してみたい。まず、バスク語において、とても重要なアスペクトである「過去」における継続相と点括相の対立の例を挙げてみる。

EX3-a)	Sartzen	zen	(Pr PaR3)	: il entrerait. " <u>duratif</u> " du passé
EX3-b)	Sartu	zen	(Pa PaR3)	: il entra. " <u>ponctuel</u> " du passé

EX3-a)では、過去における「継続の表現」を説明する「継続相」を示し、EX3-b)では、過去における「非継続の表現」を説明する「点括相」を示す。従って、バスク語には、「過去」における「継続相」と「点括相」の対立のアスペクトがある。

次に、バスク語には、「行為の完了の表現」である「完了相」のアスペクトがある。以下の例で、検討してみる。

EX4-a)	Galdu	dut	(Pa PrR13)	: je l'ai perdu
EX4-b)	Galdu- <u>a</u>	dut	(Pa PrR13)	: je l'ai (bel et bien) perdu (et maintenant je ne l'ai plus) " <u>perfectif</u> "

EX4-b)の "-a" は、一般には限定に使う冠詞であるが、EX4-a)との違いを示すための、完了の表示であり、過去分詞にのみ付け加えることができる。

「過去分詞 + "-a"」の形で示される完了相は、第一助動詞だけとの、つまり、自動詞には"izan", 他動詞には"ukan"とだけ結合ができ、法・時制との六種(1. 現実法・現在、2. 現実法・過去、3. 現実法・仮定、4. 可能法・現在、5. 可能法・過去、6. 可能法・仮定)との組み合わせが可能である。

そして、更に、複・複合形にも完了相を使うことができる。

EX5-a) Galdu ukan dut (Pa Pa PrR1,3) : je l'ai eu perdu

EX5-b) Galdu-a ukan dut (Pa Pa PrR1,3) : je l'ai eu perdu(definitivement)
(je ne l'ai plus, maintenant)
"perfectif"

EX5-a)の一般の複・複合形より更に、EX5-b)の「完了相を使った複・複合形」では、「今では、もう無くなってしまった」決定的、あるいは最終的意味あいを強く示すことができる。では、ここでも出てきた「複・複合形」とは、どのようなものであろうか。

「複・複合形」は、フランス語では、殆ど使われなくなったが、しかし、次の様な例を未だに時々、老人達から聞くことができる。

EX6-a) "Je l'ai eu su." : Pour "Je l'avais su." / "Je l'ai su."

EX6-b) "Je l'ai eu vu." : Pour "Je l'avais vu." / "Je l'ai vu."

複・複合形は、「超過去(super-passé)」を説明する、ずうっと以前の過去に起こった「出来事」、或いは「動き(action)」に関わることである。バスク語では現在も、会話や文学作品で普通の形で、複・複合形が使われている。

EX7-a) Galdu izan da (Pa Pa PrR3) : il a été perdu

EX7-b) Galdu izan zen (Pa Pa PaR3) : il avait été perdu

EX7-c)* Galdu izan du (Pa Pa PrR3,3) : il l'a eu perdu

EX7-d)* Galdu izan zuen (Pa Pa PaR3,3) : il l'avait eu perdu

P.LAFITTE 氏の Grammaire basque より例を挙げてみた。EX7-c)と EX7-d) は、"ukan"を使わねばならないが、LAFITTE 氏が扱ったラブル方言では、"ukan"が"izan"に置き換えられて、使われていたらしい。

では、その他のアスペクトで、語彙的結合によって説明される「起動相」の例を挙げてみる。

EX8) Hasten da loratzen (Pr Pr PrR3) : il commence à fleurir

バスク語では、終端相(terminatif), 反復相(répétif), 起動相(inchoatif)等は、語彙的結合によって説明される。ここでは、起動相の例を挙げてみた。

"hasten"は、動詞"hasi"の動名詞で「始める」の意味を持ち、助動詞"da-"(第一助動詞の現実法・現在・三人称単数(主語))との結合で、現在を説明できる。

"loratzen"は、動詞"loratu"の動名詞で、「花が咲く」の意味をもつ。

では、最後に、意味が同じで、スタイル(文体、言い回し)が違うバスク語の例を命令法の一部から考察してみる。

8. 命令法

IMPERATIF

La forme de base de l'impératif est une forme composée:

"radical verbal" + "second auxiliaire:"di-"(pour les verbes intransitifs)
ou "za-"(pour les verbes transitifs)

命令法の基本形は、「動詞語根 + 第二助動詞 ("di-"(自動詞)/"za-"(他動詞))」の結合形である。自動詞の助動詞"di-"の活用は、単人称主語の活用(flexion unipersonnelle)を説明する現実法・現在と同じ活用である。

Pour les verbes intransitifs

Flexion unipersonnelle: Pr.Réel 3ème pers.sg. dadi → bedi
Pr.Réel 6ème pers.pl. dite → bite

- EX1) sar dadi-la : qu'il entre (familier)
(PrR) (complétif)
- sar bedi : qu'il entre (solennel)
(IM)
- EX2) sar dite-la : qu'ils entrent (familier)
(PrR) (complétif)
- sar bite : qu'ils entrent (solennel)
(IM)
- EX3) sar hadi : "entre" pour l'impératif de la 2ème pers.sg.
(PrR=IM) (en français "tu")
- EX4) sar gaité-n : "entrons" pour l'impératif de la 4ème pers.pl.
(PrR) (conjonctif) (en français "nous")

EX1)とEX2)において、二文の意味は同じである。スタイル(文体、言い回し)が違うのである。一方は、「現実法・現在(PrR) + 補足節の接辞(-la)」で、口語的、日常的言い回し(le style familier)である。他方は、「命令法」で、改まった言い回し(le style solennel)である。

EX3)に関しては、フランス語で"tu"に相当する二人称単数の命令法での「入れ」である。ここでは、EX1), EX2)とは逆に、「命令法」の形と、「現実法・現在」の形の使用上のスタイル(言い回し文体)の対立がない。どちらかであるかを選択できるのは、状況(situation)そのものだけである。

EX4)に関しては、フランス語で"nous"に相当する四人称(一人称複数)の命令法で、"entrons"(入りましょう)である。四人称(一人称複数)の命令法の形は、「動詞語根+助動詞(現実法・現在 + 接続詞の"-n")」である。

以上から、バスク語動詞では、命令法という一つの形があるのでなく、様々な意味要素が、「命令法」の意味あいを作っているのである。

ここでは、それ以外の命令法や、動詞の人称表示等への考察は、省いた。

最後に、ここで扱った動詞活用を一覧にしてみた。

A. INTRANSITIFS :

1.	verbe "sartu"			"entrer"
A)	sartu	da	Pa PrR3	"il est entré"
B)	sartzen	da	Pr PrR3	"il entre"
C)	sartuko	da	Fu PrR3	"il entrera"
S)	sar	dadi (n)	R PrCR	"(qu')il entre"
D)	sartu	zen	Pa PaR3	"il était entré/entra"
E)	sartzen	zen	Pr PaR3	"il entrait"
F)	sartuko	zen	Fu PaR3	"il serait entré"
T)	sar	zedin	R PaCR	"(qu')il entrât"
G)	sartu	(ba) litz	Pa EvR3	"(s')il était entré"
H)	sartzen	(ba) litz	Pr EvR3	"(s')il entrait" (aujourd'hui)
I)	sartuko	(ba) litz	Fu EvR3	"(s')il devait entrer"
U)	sar	(ba) ledi	R EvCR	"(s')il entrait" (demain)
J)	sartu	dateke	Pa PrP3	"il doit être entré"
K)	sartzen	dateke	Pr PrP3	"il doit entrer"
L)	sartuko	dateke	Fu PrP3	"il entrera probablement"
V)	sar	dai teke	R PrCP	"il peut entrer"
M)	sartu	zatekeen	Pa PaP3	"il devait être entré"
N)	sartzen	zatekeen	Pr PaP3	"il devait entrer"
O)	sartuko	zatekeen	Fu PaP3	"il devait se préparer à entrer"
W)	sar	zitekeen	R PacP	"il pouvait entrer"
P)	sartu	litzateke	Pa EvP3	"il serait entré"
Q)	sartzen	litzateke	Pr EvP3	"il entrerait" (aujourd'hui)
R)	sartuko	litzateke	Fu EvP3	"il serait prêt à entrer"
X)	sar	liteke	R EvCP	"il entrerait" (demain)

B. TRANSITIFS :

2.	verbe "ikusi"			"voir"
A)	ikusi	du	Pa PrR33	"il l'a vu"
B)	ikusten	du	Pr PrR33	"il le voit"
C)	ikusiko	du	Fu PrR33	"il le verra"
S)	ikus	deza (n)	R PrCR	"(qu')il le voie"
D)	ikusi	zuen	Pa PaR33	"il le vit"
E)	ikusten	zuen	Pr PaR33	"il le voyait"
F)	ikusiko	zuen	Fu PaR33	"il l'aurait vu"
T)	ikus	zezan	R PaCR	"qu'il le vit"
G)	ikusi	(ba) lu	Pa EvR33	"(s')il l'avait vu"
H)	ikusten	(ba) lu	Pr EvR33	"(s')il le voyait" (aujourd'hui)
I)	ikusiko	(ba) lu	Fu EvR33	"(s')il devait le voir"
U)	ikus	(ba) leza	R EvCR	"(s')il le voyait" (demain)
J)	ikusi	duke	Pa PrP33	"il doit l'avoir vu"
K)	ikusten	duke	Pr PrP33	"il doit le voir"
L)	ikusiko	duke	Fu PrP33	"il le verra probablement"
V)	ikus	dezake	R PrCP	"il peut le voir"
M)	ikusi	zukeen	Pa PaP33	"il devait l'avoir vu"
N)	ikusten	zukeen	Pr PaP33	"il devait le voir"
O)	ikusiko	zukeen	Fu PaP33	"il devait se préparer à le voir"
W)	ikus	zezakeen	R PacP	"il pouvait le voir"
P)	ikusi	luke	Pa EvP33	"il l'aurait vu"
Q)	ikusten	luke	Pr EvP33	"il le verrait" (aujourd'hui)
R)	ikusiko	luke	Fu EvP33	"il serait prêt à le voir"
X)	ikus	lezake	R EvCP	"il le verrait" (demain)

9. まとめ

以上から、次のことが言える。バスク語動詞の基本を説明する上で、法は「現実法」か「可能法」である。基本となる時制は、「現在」と「非現在」である。非現在には、「過去」と「假定」を含む。これらの法・時制の組み合わせにより、六種の表現が説明できる。バスク語の複合形では、第一助動詞として"ukan", "izan"を使うが、これは、フランス語の複合時制と同じ体系を示すと言える。

動詞に関わる様態を説明するアスペクトでは、起動相(inchoatif)は語彙的結合によって説明される。またバスク語には、過去における継続の表現を説明する継続相(duratif)と否継続の表現を説明する点括相(punctuel)の対立、そして完了相(perfectif)の特に、重要なアスペクトがある。さらに、一方では現実における「非現実」を説明し、もう一方では、未来における「可能性」を説明するニュアンスの違いも表現できるが、しかし、これらの文をフランス語と比較してみると、フランス語では差異が現れず同一の文となってしまう。このような諸例をバスク語とフランス語との比較から辿ったことで、系譜的な問題は別として、バスク語をロマンス諸語から分けている隔たりや共通性が明確になり、又隣接していながら動詞における特異な言語表現を維持している各言語の構造上の特殊性を明らかに示せたと思う。今後も、このような独特の構造をもつバスク語とロマンス諸語との比較研究を進めていきたいと考えている。

〔付記〕筆者は、日本ロマンス語学会第32回大会(1994年5月、鹿児島経済大学にて開催)において、自由テーマ「フランス語とバスク語の時制における比較研究」の口頭発表をおこなった。本稿は、その際の口頭発表に基づくものである。

BIBLIOGRAPHIE

- ALLIERES Jacques. 1974, Ethnolinguistique et morphologie dialectale, Cahiers d'anthropologie et d'écologie humaine II, Paris.
----- . 1977, Petit atlas linguistique basque français, Editorial aranzadi, Pamplona.
----- . 1977, Les basque, Collection que sais-je. PUF, Paris.
----- . 1979, Manuel pratique de basque, Editions Picard, Paris.
----- . 1979, Statut et fonction des flexions verbales <<PLURI-PERSONNELLES>>, la linguistique, vol 15, Paris.
泉井久之助. 1976, 「言語研究とフンボルト」 弘文堂。
LAFITTE Pierre. 1978, Grammaire basque (navarro-labourdin littéraire), ELKAR, Bayonne.
LAFON René. 1943, Le système des formes verbales à auxiliaire dans les principaux textes basques du 16e siècle, Editions Delmas, Bordeaux.
-----. 1943, Les formes simples du verbe basque dans les principaux textes du 16e siècle, Editions Delmas, Bordeaux.
-----. 1954, Comportement syntaxique, structure et diathèse du verbe basque, B S L, 50, Klincksieck, Paris.
MARTINET André. 1962, Le sujet comme fonction linguistique et l'analyse syntaxique du basque, B S L, 57, Klincksieck, Paris.
----- . 1987, Des steppes aux océans: l'indo-européen et les <<Indo-Européens >>, Payot, Paris.
MOUTARD Nicole. 1973, Quelques remarques sur des éléments de vocabulaire basque, la linguistique, vol 9, Paris.
下宮忠雄. 1979, 「バスク語入門」 大修館書店。
SUGIYAMA Akémi. 1989, Essai de comparaison typologique entre la conjugaison basque et la conjugaison japonaise, Mémoire de maîtrise, Université de Toulouse Le Mirail. Toulouse.